

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■巻頭言■

私の『資本論』挑戦記

山下 俊幸 … 2

経済学批判としての『資本論』(下)
賃金制度という搾取制度

労働と労働力をめぐって

中澤 秀行 … 4

鉄路切り捨て反対で、オール北海道を

―「国鉄分割民営化を問う」十勝集会報告―

佐野 周二 … 9

上場めざし線路切り捨て

―「国鉄分割民営化と日本の政治と労働運動」(上)―

10

読者からのおたより

……………

12

刊 旬 社 会 通 信

NO.1236

二〇一七年三月一五日号

二〇一七年三月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

私の『資本論』挑戦記

学習会

今から、四〇年以上前のことだった。職場の若い仲間達数名で、毎週我が家で、話し合い（会議）と、学習会をやっていた。学習会は主に古典であり、時には、『学習誌』なども活用し、情勢や他労組の闘いを学んでいた。学習会はすべて本の「読みあわせ」を基本としていた。会議と学習会は隔週で毎週集まっていた。そのうちの一人S君は、会議には必ず参加するが、翌週の学習会には参加しなくなった。この状態がしばらく経った頃、私は彼と二人だけで話をした。会議には皆勤なのに、どうして学習会に来なくなったのか尋ねた。彼は黙ったまま口を開こうとしない。沈黙の時間だけは過ぎていく。そして、彼は重い口を開いた。「実は、本の読み合わせが苦手だ。漢字がわからず恥ずかしい。だから、学習会には行かないようにしている。」という。

原因は分かった。私は「しかし、学習しないと職場の状況も正しく見えなくなるし、労働者としての正しい生き方もできない。特にマルクス、エンゲルス、レーニンの書物は、難しいが読み、語り合うことで、労働者思想が高まるし、職場で闘うことの意味が理解できるようになる」と、つづけて「漢字が読めないのは俺も同じだ。それが恥ずかしい、と思うなら次回の読み合わせのページは、あらかじめ分っているのだから、事前に辞書で調べたらどうか、何ページの〇〇という字は何と読むのか、どういう意味なのか、ノートに書いてみてはどうか」という提案をした。

彼は、次回から参加するようになった。そして、彼の「大学ノート」には、ページ、行ごとに、漢字と読み方、その意味まで書いて持ってくるようになった。

彼の本も「ひらがな」で一杯だった。ある時の学習会で、私が漢字を読めず、困っていたら、彼は「山さん、こんな字もわからないの？」では、金田一さんが教えて上げましょう」得意げになって教えてくれる。私だけではなく、みんな助かった。彼の辞書とノートには、何度も同じ字を検索した跡が残っていた。

その時、私は、「一人ひとりに弱点はそれぞれある。しかし、その弱点を自覚し努力すれば、必ず克服することはできる。弱さは強さに変えられる」ことを学んだ。今回の私の『資本論』学習は、読めない字が多く辞書を片手に悪戦苦闘の連続だった。

国鉄闘争の総括運動の提起から『資本論』へ

国鉄闘争にどっぷりと関わっていたこともあって、その総括は私自身にとっても、運動家として生きてきた証として、自己批判的にまとめる作業を開始している。国鉄闘争の教訓は「室の山」ほどある。さて、始めようと思ったら、何をどうしたらよいか、頭の中の整理がなかなかできない。そこで、改めて「三池闘争の総括」から開始した。三池闘争に深く関わりをもった向坂逸郎先生、現地三池闘争の指導的立場であった、灰原茂雄氏、塚元敦義氏らの本を十数冊読んだ。

労働者の意識、組織性、闘争のエネルギーなどが、古典を中心とした学習で培われ

たものであったことを再認識した。私は、これまで『共産党宣言』と『空想から科学へ』を常に持ち歩き、数え切れないほど、そしてボロボロになって、何度も新刊を買って読んできた。そして、私はそれで満足していた。三池闘争の勉強の中で、『資本論』のことが、気になり始めた。その頃、小林晃先生の「現代と『資本論』」に出会い、感銘し繰り返し読んだ。

向坂著『資本論入門』

昨年の十一月初旬、九州に行くことになり、愛読書の二冊のほかに、もう一冊『資本論入門』（向坂逸郎著・岩波新書）を持参した。飛行機の遅れもあって、時間を持て余していたところ、『資本論入門』を思い出し、全部読んだ。

「はじめに」の項で、先生の人間性、情熱、揺るぎなき思想を改めて感じさせてくれた。また、「あとがき」では、『資本論』はやさしい本ではない。しかし、少し根気があれば、読みとおせない本でもない。「私のまわりには、学生や労働青年たちの研究会だけでなく、まさに「停年」に達している人々と、この本について語ることもある」「この本は、学習を続けてさえいれば、必ず読むことに楽しさを覚えるようになる」「小学校を出ただけの人もまじっている三池労組の人々とともに『資本論』の学習をやってみた」「『資本論』そのものを読んでほんとうに分ってもらいたい」と記されていた。

四十数年前、私は何度となく『資本論』に挑戦してきたが、そのたびに五〇ページから六〇ページで、跳ね返され挫折を繰り返してきた。

『社会通信』では、小林 晃先生、原野人氏、中澤 秀行氏ら多くの方のマルクス理論が満載である。私は、いつもこれを楽しみにして読んでいる。

向坂先生とは、二度ほど直接に鷺宮のお宅を訪問して話を聞いたり、書庫を案内して頂いたりしたことがあったが、『資本論入門』を読んで、先生と再会した感覚になった。そして、帰宅後、我が家の書庫から、『資本論』に関する本を引っ張り出し、まず、『資本論』三巻、四冊を読み切ろう、と考えた。

ところが、『資本論解説』（向坂逸郎編著・労働大学刊）「序説 『資本論』の歴史的意義」の、五『資本論』の読み方、の中で先生は、「初めて読む人、経済学を専攻していない人なら、第一巻から第二巻、第三巻と読み進まないで、第一巻を終りまで読んだら、ここでひとまずとまって、もう一度第一巻を初めから読んでみたらどうかと思う」「第一巻は、マルクスが全三巻で述べようとしたことの全体をひとまず説明したことになるようにできている。だから、初めての人は、この第一巻を二度ほど読むと、大づかみに『資本論』の全貌を見ることになり、今日われわれの住む社会の動く法則の根本を知ることになる。それから、第二巻、第三巻と読むのがよくはないだろうか」

挑戦

そして、「社会通信」の滝野さんからも、助言を頂きながら、中澤さんからは平田喜久雄先生と、和氣誠先生の『資本論』の勉強に役立つ、本（論文）のコピーを送っ

て頂き、準備万端で『資本論』への挑戦が続いた。

私は、まず自分に対して、必ず完読すること、毎日休まず読むことを命じた。『資本論』挑戦の第一回目は、深く考えることなく、ひたすら読みつづけた。昨年十二月末には、第一巻（九六五頁）を完読し終えた。向坂先生の言葉どおり、もう一度、第一巻を読みなおした。この時は、「読む」ことより「理解」を重視し、解らない箇所、自分なりに重要だと思ったところ、もう一度読み直した方が良いと、思われるところに、※印、付箋、赤線を入れた。読み続けるにつれ面白くなってきた。暇さえあれば机に向かっている。

開始した十一月中旬から、老々介護をしながら、暮も正月も読み続け、今日まで一日も読まない日はない。一日三時間〜一〇時間、平均して一日四・五時間読みつづけた。特に妻がデーサービスに行く週三日は、読書に明け暮れていた。第一巻の二回目は、一月の二〇日頃終えた。三回目は、読みながら※印、付箋や赤線を入れたところを抜き書きして、やっと昨日、一応完了した。

この間、『資本論入門』三回、『マルクス経済学の方法』（向坂逸郎著）二回、その他、関係する書物も、必要に応じて必要な箇所を抜き読みし、参考にした。

今日以降は、当面、抜き書きしたものを点検し、補強し、「私の資本論」に仕上げようと考えている。そして、また、第一巻を読もうと思う。

向坂先生が言うとおり、実に面白い。最近テレビはまったく見ることがない。たまにニュースを見る程度である。月十二万円程度の年金では、新刊はなかなか買えない。定期購読していた雑誌なども全部やめた。貧乏しても心の貧乏を感じたことはない。読みたいと思っている本は、家の書庫にたくさんある。大きな机の上には、当面読もうと用意した本が三十冊以上積まれている。人生の先は見えているが、少しでも、向坂イズムを学び、マルクス主義者に近づきたいと思うこの頃である。（山下 俊幸）

経済学批判としての『資本論』（下）

賃金制度という搾取制度

労働と労働力をめぐって

（八）『資本論』での「労働」と「労働力」、その定義等

大内兵衛先生は、「いかなる専門でも、教科書の第一ページは定義であるしかない」（榎田民蔵著・大内兵衛補修『「共産党宣言」の研究』青木書店232頁）、と言われます。マルクスは『資本論』の中で、ゲーテの『ファウスト』の言葉を、次のように引用しています。「まさに概念の欠けているところに、言葉がうまく間に合うようにやってくるものだ」（『資本論』岩波文庫第一分冊125頁）と。言葉の定義、その概念は、まったく大切です。

では、マルクスは、『資本論』で、「労働」と「労働力」という言葉をどのように使っているのでしょうか、そして、定義しているのでしょうか。

まず、マルクスは『資本論』第一編 商品と貨幣の第一章には「商品」、その第二節には、「商品に表わされた労働の二重性」というタイトルを付けました。ここで、「商

品に含まれている労働の二面的な性質は、私をはじめ批判的に証明したのである。」と述べ、続いて「この点が跳躍点であって、これをめぐって経済学の理解があるのであるから、この点はどこでもっと詳細に吟味しなければならぬ。」(『資本論』岩波文庫第一分冊78頁)と述べ、商品の使用価値を作る具体的有用労働と、価値を作る一般的抽象的労働について展開します。

次に、「生産的活動の特定性、したがってまた労働の有用な性格を見ないとすれば、労働に残るものは、それが人間労働力の支出ということである。裁縫と機織りとは、質的にちがった生産活動ではあるが、両者ともに、人間の頭脳、筋肉、神経、手等々の生産的支出であって、この意味で両者とも人間労働である。それは人間労働力を支出する二つのちがった形態であるにすぎない。」(『資本論』岩波文庫第一分冊82～83頁)と述べ、この節の最後では、「抽象的に人間的な労働の属性において、労働は商品価値を形成する。すべての労働は、他方において、特殊な、目的の定まった形態における人間労働力の支出である。そしてこの具体的有用労働の属性において、それは使用価値を生産する。」(『資本論』岩波文庫第一分冊87頁)と述べ、この節をまとめています。

「人間労働」とは、「人間労働力の支出」なのです。労働は、労働力の支出なのです。次に、「労働力」の定義ですが、マルクスはどのようにしているかと言う事になります。これについては、「貨幣の資本への転化」と題した第四章、その第三節において述べています。この節のタイトルは「労働力の買と売り」となっており、次のようになります。

「貨幣所有者は、市場でこのような特殊な商品を発見する——労働能力または労働力がこれである。」続けて、「われわれは、労働力または労働能力を、一人の人間の肉体、すなわち、人間の生ける人格の中にあって、何らかの種類の使用価値を生産するばあいには、人間が活動させる肉体的、精神的能力の総体であると考えろ。」(『資本論』岩波文庫第一分冊291頁)と。

そして、「労働力の価値または価格の労働賃金への転化」と題される第一七章には、次の様な記述があります。

「商品として市場で売られるためには、とにかく労働は、それが売られる前に存在せねばならないであろう。しかし、労働者が労働に独立の存在を与えようとすれば、彼は商品売るのであって、労働を売るのではないであろう。」(『資本論』岩波文庫第三分冊50頁) 商品の売り手は、市場で、商品の買い手と相対していなくてはなりません。労働市場で買い手と相対しているのは、労働者自身であり労働ではない、と言っているのです。労働者自身も持っているものについて、マルクスは次のように述べています。

「この労働力なるものは、労働者の一身のうちに存在するものであり、それがその機能である労働とは別のものであることは、機械がその作用と別のものであるのと同様である。」(『資本論』岩波文庫第三分冊55頁)と。マルクスは、「労働者の一身に存在するもの」は「労働力」であると言い、「労働力」と「労働」のちがいは、「機械とその作用」のちがいである、と説明しています。

(九) 特殊なる商品としての「労働力商品」

人類の歴史が変化発展して来た中で、私達は、「マルクス以来資本主義的生産方法と呼ばれているブルジョアジー特有の生産方法」(『空想より科学へ』岩波文庫66頁)が支配している現代社会に生活しています。それは、自由主義経済社会とか、市場経済社会とか様々な言い方でされていますが、いわゆる、資本主義社会(資本制社会)です。こうした社会の特徴について、マルクスは次のように述べます。

「資本主義の時代を特徴づけるものは、労働力が労働者自身にとって、彼に所属する商品の形態をとること、したがって、彼の労働が、賃金労働の形態をとることである。他方において、この瞬間からはじめて、労働生産物の商品形態が一般化する。」

(『資本論』岩波文庫第一分冊296頁)と。

特殊な商品である「労働力商品」の「売りと買い」、その中で行われる生産活動、すなわち、「労働力の消費過程は、同時に商品と剰余価値の生産過程である。」(『資本論』岩波文庫第一分冊305頁)と言うことなのです。

労働者は、「賃金」を得るために働きます。「賃金とは何か？」を知ることが、賃労働と資本の関係、すなわち賃金制度という搾取関係を明らかにすることそのものです。資本家なり経営者が労働者を雇用するのは、慈善事業や社会福祉事業の為でなく、儲けるためです。それは、資本の側からすれば「利潤」ですが、労働者の側からすれば「剰余価値」です。何れにしろ、このように言われる「儲け」は、特殊商品としての労働力が生み出すということ、これです。ですから、エンゲルスは「賃金制度」という論文で、次のように述べます。

「労働者階級の経済上の屈辱の内容をなすものは、賃金の高い低いではない。この屈辱は、労働者階級が自分の労働にたいして、この労働の全生産物を受けとるかわりに、賃金と名づけられる自分自身の生産物の一部分で満足させられているという事実のうちにふくまれている。資本家は労働手段の所有者であるという理由で、全生産物を着服する。(そのうちから労働者に支払いながら。)だから、労働者階級がいっさいの労働手段——土地、原料、機械など——の所有者となり、それによってまた自分自身の労働の全生産物の所有者となるまでは、労働者階級の真の救いはないのである。」(『賃金制度』『労働組合論』マルクス・エンゲルス著 国民文庫91頁、『マル・エン選集』第八巻 新潮社103〜104頁)

老婆心であります。が、「全生産物の所有者」になるのは、「労働者階級」です。そうなったときの、「社会的総生産物」の分配については、マルクスが『ゴータ綱領批判』のなかで述べられていますので、この際ぜひとも勉強して下さい。(『ゴータ綱領批判』マルクス著 岩波文庫33頁)

(十) おわりに

剰余価値を生む剰余労働について、マルクスは『資本論』の第八章「労働日」の、第二節「剰余労働にたいする渴望」のところで、次のように述べます。

「資本が剰余労働を発明したのではない。社会の一部が生産手段を独占していると

ころでは、どこでも労働者は、自由であれ不自由であれ、生産手段の所有者の用いる生活手段を生産するために、自己保存に必要な自分の労働時間に、超過労働時間を追加せねばならない。この所有者が、アテナイの貴族、エトルリアの神政官、ローマの市民、ノルマンの領主、アメリカの奴隷所有者、ワラキアのボヤール、近世の大地主、あるいは資本家のいづれであるにせよ、このことは変わらない。」(『資本論』岩波文庫第二分冊100頁)と。

そして続けて、「とはいえ、ある経済の社会形式において、生産物の交換価値でなく、使用価値が主たる地位にあるばあいには、剰余労働は、あるいは狭くあるいは広く、欲望範囲によって制限されていて、剰余労働にたいする無制限の欲望は、生産そのものの性格からは生じない、ということが明らかである。ゆえに、古代にあつては、過度労働は、交換価値をその独立の貨幣態容で獲得することが肝要であるばあいに、すなわち金および銀の生産において、恐ろしいまでに示される。致死労働の強制が、ここでは過度労働の公認形態である。」と述べます。

資本主義的生産様式における生産は、剰余価値を求める生産体制です。従つて、「剰余労働にたいする無制限の欲望」こそ、資本なり企業なり経営者に課せられた絶対的命令です。たんに価値増殖しているだけでは、資本は生き残れません。それは、最大限に、そして無制限にです。小泉政権時にすすめられた大幅な規制緩和ですが、規制緩和とは、様々な制限を取り外し、資本の「無制限の欲望」に応えるもの以上でも以下でもありません。

最近では、毎日のように広告大手の電通での過労死事件が報道されています。これは、氷山の一角でしょう。「死ぬまで働かせる」のは、マルクスがここで述べる「剰余労働にたいする無制限の欲望」がなせる業です。現在、政府自民党により、「働き方の見直し」が提起されることに、二重の意味で憤りを感じるのは、私だけではないでしょう。

労働者の屈辱、それは、賃金制度という搾取制度にあります。そして、改めて言うまでもなく、より大きな儲け、企業側からする「利潤」を求めて競争する事こそ、資本の本性です。その為に、生き残りをかけての競争を強いられるのです。

エゲルスが『賃労働と資本』の「前書き」で、なぜに「労働」を「労働力」へ変更しなくてはならなかったのかについて説明してきた積りです。

高校時代、数学の坂野先生に研究室に呼び出されたことがあります。「おい、少しは要領よくやれよ！ こういうた答えは提出しなくても良いだろうに！ 腹が痛いとか、頭が痛いとか理由を作つて、答えは出さずに、帰宅すれば、再試験があるでしょ！ 提出するから採点しなくちゃならん。それにしても、君の積分は分つた積りで何も分かっていないが、微分は微かに分っている、これこそ本当の微分積分だ！」と笑われました。劣等生にも優しい先生達に囲まれた、充実の高校生活でした。

私が今回「説明してみた積り」であつても、それは「積り」であつて、要領を得ぬ、引用ばかりの説明であることを、読み直してみても実感しています。マルクス・エンゲルスの引用箇所を、その原文に目を通していただければという思いがあります。

これを機に、『資本論入門』や『資本論』等々を、座右の書としてくれる人が、一人でも増えればと言う思いだけは伝わってほしく思っています。

(二〇一七年一月二十日、中澤 秀行)

〔追記〕 『賃労働と資本』勉強のために

『賃労働と資本』を独習するのに手ごろな教材として、『学習「賃労働と資本」』(向坂逸郎・和氣誠著 労大新書)があります。『資本論』や『賃労働と資本』に最も精通した人達による手引書ですから、文庫本等と共に勉強されることをお勧めしますが、この著作を勉強する際に知っておくと、助けになることを記させていただきます。

『学習「賃労働と資本」』は、1974年に初刷が刊行され、1985年に第八刷が刊行されました。岩波文庫版の『賃労働と資本』を使つての向坂先生宅での学習会をまとめた作品です。しかし、当時の岩波文庫版の『賃労働と資本』は、「1954年第15刷改版」が使われており、漢字はすべて「旧字」(例えば、「経済学」は「經濟學」、「剰余価値」は「剩餘價值」、等々)となっていて、戦後の義務教育を受けた人たちにとつてはまったく読みにくい版です。もちろん『学習「賃労働と資本」』は新字になっています。現役の岩波文庫版『賃労働と資本』は、「1981年第46刷改版」です。従つて、初刷から第八刷までの『学習「賃労働と資本」』とは、引用されている岩波文庫版『賃労働と資本』との頁数も合致しません。

その後、『学習「賃労働と資本」』は、1993年第9刷として刊行されましたが、この時、和氣先生による「追記」が加えられると共に、引用ページは、現在書店で入手可能な岩波文庫版『賃労働と資本』(1981年第46刷改版)に依拠したものになりました。加えて、38頁に、「日本資本主義の発達」について学ぶ時の参考文献が紹介されていますが、旧版では、『日本経済論』(小島恒久・田中慎一郎・原田伝・小林晃著 法律文化社)と『日本の国家独占資本主義』(大系国家独占資本主義 四 河出書房新社)の二冊が紹介されています。しかし、旧版から新版といえる第9刷までには約二十年の歳月が過ぎており、これらの書籍は入手困難だったのでしよう、代りに、『日本資本主義の諸段階』(岡崎三郎著 社会主義協会)と『日本資本主義論争史』(小島恒久著 ありえす書房)の二冊が紹介されています。今では、四冊ともお求めは古書店となっております。(まなぶ書房/0667213635、は便利です。)しかし、第9刷が刊行されたまま、出版元の労働大学出版センターでは絶版となっております。

向坂先生は、『学習「賃労働と資本」』の出版に際しては、特段の愛情を注がれていたように思っています。

『学習「賃労働と資本」』を丁寧に読みますと、14頁に「新ライン新聞」からの長い引用があり、出典は、(新潮社版、『マル・エン選集』第五巻、75頁)とあります。しかし、『マル・エン選集』のその個所を読んでみますと、訳文が違ふ事に気が付きます。『マル・エン選集』の訳文そのままではないことに気づきます。『学習「賃労働と資本」』のために、向坂先生は新たに翻訳されたと言うのです。このエピソードは、かつて、『賃労働と資本』の勉強会で、和氣誠先生から教えていただきました。使用テキストは長坂聡訳の労働大学版で、そこには1994年10月29日、とあります。

鉄路切り捨て反対で、オール北海道を

―「国鉄分割民営化を問う」十勝集会報告―

あれから三〇年！「国鉄分割民営化を問う」十勝集会（二・十八）で滝野さんの講演を多くの方に伝えたいと思ひ原稿にした。主催は平和運動フォーラム十勝ブロック協議会と帯広平和運動フォーラム。主催者の斉藤道俊共同代表（弁護士）は、「政府・自民党はローカル線をなくさないと言ったが、全国で三五〇〇万人の反対署名が集まった運動の正しさが証明されている。麻生財務大臣は分割民営化が間違いと正直に話したが、安倍首相は人口減だごまかした。

JR採用差別は『不当労働行為がある』と二〇一一年に解決したが戦争法、憲法が危機になっている。今日は国鉄闘争を先頭になって闘ってきた故木下栄治さん（分割民営化攻撃時の国労本部青年部長）の思い出を語るつどいがある」と挨拶した。

司会の平和運動フォーラム・米澤昭彦事務局長は、「JR採用差別事件から二四年経過、一九八七年の国鉄分割民営化から三〇年の節目、滝野さんは三年前『JR事故の本質に学ぶ』を講演した」と講師を紹介。

『国鉄分割民営化と日本の政治と労働運動』をテーマに滝野さんが講演。「国鉄分割民営化の本質は階級的労働運動をつぶすこと。安全への投資もできず、JR北海道の廃線問題は分割民営化の失敗を証明した。国の責任で解決すべき」と強調した。

JR北海道・島田社長の記者会見用に作られた『当社単独では維持することが困難な線区について』（平成二八年十一月十八日）を説明。①JR北海道は小さいが独占企業つまり鉄道網を独占する資本。「当社単独で維持できない」と脅迫し、金を出せ。②「上下分離」の目的は地域に金出させることだけ。③JR北の全株保有は国、国営企業。役員十四人は国から経営を任された国営企業の経営者、彼らは国の言うことに逆らえない。④政府・JR・国土交通省の考えはインフラ輸出、鉄道ビジネスだ。⑤国鉄分割民営化問題は早く終わらせたい。それがJR九州の上場。⑥JR北海道上場も急がせている。

中曽根第二臨調行革の「お座敷をきれいにし、立派な憲法を安置する」「憲法をつくる力が憲法だ」「国労は二〇三高地 潮がみちるよう国労包囲網つくる」など総資本の攻勢について述べ、「三〇年闘った皆さんの力がある、北海道は沖繩に続くこう、スローガンは、日本の食糧基地が危ない、過疎化が進む住民の足を守れ、合理化絶対反対、国が金をだせ。政府が今一番困っているのは原発、闘いの前進へ経験・知識を練り高めよう」と訴えた。

国労議員団団長でもある池本柳次道議会議員（元国労本部青年部長）は、「JR北海道の島田社長は鉄路をはがすことが使命。社長は橋梁基礎など五〇年以上、一〇〇年経過の施設もある、補修なら新たに四三〇億〜四七〇億の金が必要、JR北海道はもちませんと突然言う」「高橋道知事にJR北海道の実体は特殊会社、国が大株主の会社だ、旧国鉄のままだとやり取りし、知事もその通りと認識させたが再確認させる。国の責任でこの線路を守ることを国に迫らなければ鉄路を残すことは出来ない」と語った。国労北海道が道知事へ「北海道がその先頭に立って線路を守る立場で国に対し

て働きかけをしてほしい」と要望書を提出（池本道議立会い）したことを報告した。

平和運動フォーラム・福留克志共同代表は「講演レジメは分かりやすく知識がない方も分かる内容になっている。三公社五現業の解体、国がどうしてやったか、国鉄分割民営化の課題を知りこれからの労働運動を考えていこう」と集約した。（佐野 周二）

上場めざし線路切り捨て

―「国鉄分割民営化と日本の政治と労働運動」(上)―

友人・仲間から北海道新聞（『道新』）の資料が送られてきた。勉強していい話しろの激励と思う。安倍さんがJR北海道の問題で、「分割民営のせいでない、人口が減ったから」は全くの大ウソ。自分たちは総理大臣の大ウソに寛容すぎるのではないか。

分割民営化の本質は階級的労働運動をつぶすこと。労働運動を戦前のような産業報国会、大政翼賛会的な政治をめざすが一緒になって、中曽根さんより悪い安倍さんの祖父の岸さん。今日の問題は四〇年以上も時間をかけられている。

恫喝そして脅し

この冊子『当社単独では維持することが困難な線区について』（平成二八年十一月十八日）は、JR北海道社長の記者会見用に作られたもの、ひどい内容ですね、凄まじい、脅迫です。目を通してそう思った。

「当社単独では維持できない」の文句、どう考えますか？ JR北海道はJR会社の中では小さいが独占企業つまり北海道の鉄路を独占する資本、だから俺たちのこと聞かないと線路取っ払うぞ、それが嫌なら当社単独で維持できない、お前ら銭出せ。

こういう記者会見の文章見たのは初めて。露骨に書いてある。①国鉄時代であれば、特定地方交通線に指定され、原則廃止とされた線区というわけ。特急列車が運行されている線区や観光モデルとしての線区、石勝線、釧網線でしょう、本来廃止されて当たり前とはなんとこの言いぐさでしょうか。②おれたちは国鉄時代より努力している。凄まじい合理化、労働者は半分以上減らされ、線路・駅もなくなりました。そのことで利用者が減った。③残したければ四の五の言わず協力せよと。資本の論理を打ち出してある。④「国鉄時代に整備した施設の老朽化に修繕費、設備投資、収支均衡を図るため減らした」、安全投資が出来ない会社がつくれ、三年前お伺いしたようにボロ（事故）が出た。自ら分割民営化の誤りを証明している。

記者会見の資料がこういう状況です。ですから①もはや努力は限界、民間会社として維持できるレベルをはるかに超える。②このままでは安全輸送、鉄道維持は困難。三年以内に全道の鉄道は続けられなくなり、第二の国鉄になる。そして③赤字を生む路線は廃止、競争つける路線は強化する。

いいたいことははっきりしている。おれたちは早く株を上場したい、出来るだけ赤字を減らさないとダメ、不採算路線切り捨てだ。JR北海道は絶対赤字にならない？

そんなことない、赤字線切り捨てれば必ず黒字になる。東京の鉄道会社、大阪の鉄道会社みんな五〇キロから一〇〇キロ、長くないんです。赤字減らす議論が必要とは

線路を切り捨てること。日高線沿線でも地域協議会開かせた。日高線沿線八町は出来る限り協力したいが、JRは余りにも横暴と半分以上が出席してない。

十一月十九日の記者会見社長が非常に強調したのが「マイルール意識」、JRが労働者に私たちの会社、おれたちの会社の労資共通の意識を持ってという、職場内の思想攻撃を地域住民に持ち込もうとする姿そのものです。

分割民営化は大失敗

JR北海道が赤字の原因とする少子化、札幌への人口一極集中は前から分かっていたこと、今に始まったことではない。それをJRの責任、自治体の責任に転嫁するのは。北海道の高橋知事は通産省出身ですね、高速道路網の拡大、これも今始まった問題でない。都市計画は四〇年前、新幹線建設は五〇年前、六〇年前からつくられる。そうやって国土計画、道路計画やられるわけ。つまりどこにいつ道路、地域開発するか地方自治体もJRも分かっている。

安定基金はJR北が赤字会社として始まったことの証明でしかありません。その利息は、当初七・三%四九八億円、今三・四%二四二億円。今ゼロ金利、安定基金になぜ三・四%の利子がつくのか、三・四%の運用益のカラクリこそ問題だ。つまり投機でしょ。

競争激化もわかっていたことです。北海道新幹線の実態についてです。青森く函館の四く九月利用客は一六四万。乗車率はたったの三九%。JR北は見通しを上回っている。と強がり言っています。が、三年間の見通しは年の赤字四八億円。新幹線出発で並行在来線の江差線は第三セクター化されました。会見用冊子は札幌延伸(二〇三〇年)で「札幌開業に伴う経営分離区間は、施設のスリム化など効果的な運営をおこなう」と並行在来線函館本線の第三セクター化は必至と云っている。こうして残る鉄路は小樽く札幌く新千歳く苫小牧までとなる。

JRと飛行機会社と競争になりますか？(東京く函館の鉄路と飛行機の所要時間、運賃の具体例を示して説明)需要と供給の関係で北海道から東京に来る方少ない、東京からの料金は安く競争にならない。だから麻生さん石破さんが言う通り、誰がやっても出来るわけではない。最初から大失敗、政策まちがえた。

今度の麻生さんの話は違います。いま沖繩が果敢に闘っていますが、支援する都道府県ありません。北海道どうなりますか。TPPなくなつたでしょう。か、無茶苦茶なトランプ何をやりたいのでしょうか。多国間関係の協調的な自由主義とトランプ流のウソと力で押しまくる自由主義に違いはありません。TPP反対していたある党は、TPPの方が良かったとか頭を抱えている。TPPがあるうがなかるうが二国間になるうが、北海道、とくに十勝の食糧基地はたいへんな状況になる。食糧基地としての北海道を安倍さんはトランプに売るかも知れない。したがって北海道・日本の食糧基地守れ、住民の足守れと、第2の沖繩をつくってほしい、皆さんの運動でつくるという。こと、二〇年やってきたわけ。そう言った闘い・広がりをつくり上げてほしい。

麻生さんは何も考えておりませんアッソ(笑)、保守としての直観・本能での発言でできた。北海道は第2の沖繩、直観ですね。

線路を切り捨てまっしぐら

結論は分割民営化は失敗。借金三七兆円の大半は残ったまま、鐵路廃止が続く。JR北はこう言います。国鉄時代の幹線は一日八〇〇人以上、地交線は八〇〇〇人未満、そして特定地交線四〇〇〇人未満は、廃止対象一七九路線中八二が廃止された。そして、今はやりの選択と集中です。JRの人減らし、ATC、自動出改札機、駅の無人化、ワンマン化、そして最近では運転士・車掌の兼務化等々。

JR北の廃線基準は、一日〇二〇〇人は廃線、二〇〇〇二〇〇人は駅の無人化・廃止、運賃値上げ、第三セクター、「上下分離」、利用促進策。この二日間、車に乗って上士幌に行きましたが、路線バスに一度もあわない、観光バスにもあわない。どこでも二時間〇三時間走り回って見れば見て当然でしょうが、一台も会わない。バス転換は地域を守らない”そのものでないか。

JR北の廃線基準をJR六社にあてはめると一日〇五〇〇人以下は北一、東七、西四、九州一、四国一。五〇〇〇一〇〇〇人は北一、東八、西二、九州三。一〇〇〇〇二〇〇〇人は北三、東八、東海一、西八、九州五、四国二。全国一六〇〇〇の路線の五七にもなるのです。これらが、北海道にならへど切り捨てられていく。

JR北の株式上場の条件は、路線の廃止で、鉄道部門の黒字化、地域に金出させること。「上下分離」の目的は地域の金出させることだけ。JR北の全株保有は国、国有企業です。JR北の役員十四人は国から経営を任された国有企業の経営者、彼らは国の言うことに逆らえません。

政府・JR・国土交通省の交通政策は、インフラ輸出、鉄道ビジネスです。鉄道国際戦略室など鉄道売込みの組織が国交省や内閣官房につくられている。関係省庁、鉄道ワーキングチームで鉄道網の在り方を検討しているが、金がない、手の打ちようがない、どう地域を巻き込むかが中心です。『道新』に、地域から知恵だそう、利用促進策考えよう、地域の特産を打ちだそうと提案される方も少なくありません。

これに対し『道新』は、「もうJRにまかせられぬ、JRにだけ解決を求めても本質の打開は難しい。まちづくりの視点で鉄道をとらえ、国は道路偏重の交通政策を練りなおせ」その通りです、これをどう実現させるかです。

解決策は①国に金出させる。経営悪化は「分割民営化」↓責任とれ。②東・西・東海は大黒字、東は四〇〇〇億円、東海は六〇〇〇億円、西は一九〇〇億円、北の赤字はたかだか二〇〇億円、四国も一〇〇億円、二つ併せても三〇〇〇四〇〇億円でしょう。三島の赤字は三社に利益をまわせ。しかし彼らは資本の論理で絶対出しません。

三〇年たたかい続けた皆さんの力がある、だから北海道は沖繩に続こうよ、スローガンは農業自由化反対です、日本の食糧基地が危ない、過疎化が進む住民の足を守れ、合理化絶対反対だ、国が金をだせ。(まとめ 佐野周二・つづく)

◇読者からのおたより◇

『国労攻撃』滝野さんの生講演(2月18日16時)は初めて拝聴。中曽根と財界結託し当時新聞紙面に毎日『国労攻撃』が。その頃の私は臨時雇用員として、帯広電気区池田電気支区に勤務しておりました。なので手に取る様に分かりました。

(東京・兼子千栄子)

鉄道には夢がある 私がかどもの頃「線路は続くどこまでも…」の歌を覚えました。最近の鉄道事情は新幹線の普及とともに、あちこちで「廃線」。どこまでも続かなくなりました。鉄道には夢があります。

(長野県飯綱町・山浦隆芳)